

現実の側面 佐佐木定綱

「仕事をしないで生きたい」。そんなことを言ったら当時の彼女に別れを告げられた。冗談だったが、笑えない冗談というやつだ。

「短歌往来」十月号の特集は「ハードワークキングをうたうVI」。

仕事の歌はかくもいろいろなことに気づかされる。

・死者生者行き交う真闇の洞窟深く岩垂氷より現るる螢火

・みまつりの沈黙の隙にふと生るる歌よ指もて空に書かむか

新里スエ
長岡千尋

まずは場所の歌。一首目、作者は沖縄平和ガイドをしているという。わたしも沖縄戦で使われた洞窟に入ったことがあるが、本当に「真闇」だった。目をつむつてもあけても変わらない闇があった。二首目、神社神職の歌。宮司は常にまつりの中を生きている。我々の非日常が日常なのだ。

・物を盗るひとはいません駐車場いちめんゴロゴロ干した玉ねぎ

・終電を見送りし駅ひとつづつ明かり消えゆく人影もなく

嶋田さくらこ

渡辺雪子

続いて時間の歌。一首目は新聞配達の歌である。誰もいない早朝、玉ねぎが転がっている駐車場。「物を盗るひと」どころか、人間自体いなくなってしまうたかのようなのである。二首目はタケ

シードライバーの歌。こちらは夜の歌である。人影もなく、駅の光も消えてゆく。終電を逃したひとをまだ待つのだろうか。孤独さが歌われている。

・百二十馬力のトラクター唸らせ午前三時地球の面を吾が起こし
ゆく
山口 勝

・オープンブザーの音が容赦なくわれを現実世界に戻す
佐久間得幸

道具の歌。一首目は農場の歌。地球よりも早起きしてトラクターで地球を起こす。地球と百二十馬力という対比が効いている。二首目はパティシエの歌。「われ」は集中を必要とされる作業をしていたのだろう。没頭し、自分だけの世界に入っていたところをオープンブザーで呼び戻される。ここではブザーの音のみが現実世界と内面世界とを繋いでいる。

仕事とはなんなのだろう。今時の就活生のような問いだ、やりがい、給料、福利厚生、実家がそうだから……。なんにせよ、歌の題材としてはおもしろいものに違いない。社会的な立場として、仕事の肩書きは重要だ。重要なのは偉いとされているかどうかではなく、世界の見え方の違いである。子供と大人で視点が違えば興味も考えも違うように、立場が違えば見える世界は大きく変わってくる。生活時間や置かれている立場から見ると現実世界。社長とアルバイト、農家と料理人、同じ事柄でも違うものを見る。現実の一つではない。生きる人間の数だけ現実が存在する。多角的に詠まれた現実のさまざまな側面を知ることができる一つの方法であろう。